

<地域コラム>

「居場所」としての図書館の活用推進を

高橋真太郎

1 はじめに

鳥取県立図書館では、県内市町村立図書館、及び県内の学校図書館と連携しながら、図書館を住民の皆様の居場所として活用してもらう取組みを進めています。これは、当館で平成29年度に始めた「サポートの必要な家庭」（経済的に困窮する家庭やひとり親家庭、ひきこもりの状態でお悩みの家庭など）を応援する事業の一環です。

誰もが無料で利用できる図書館がどのような役割を担うべきなのかを改めて考え、社会と共有し、より多くの人に活用してもらいたいという取組みです。

2 “こども食堂”の活動に触発されて

図書館を居場所にと考えたきっかけは、こども食堂の活動を見聞きしたことでした。こども食堂では、経済的に困窮する家庭の皆様に、無料もしくは安価で食事を提供しますが、その目的が、食べ物の提供に留まらず、食事をするを通じた、安全な場所や、人とのつながり、社会的経験を提供しています。この話を聞いた時に、図書館にもできることがあるのではと考えはじめました。

3 居場所としての図書館

「図書館」という言葉を聞くと、多くの人が「本」を想像します。本は図書館が社会に提供する重要な資源ですが、それ以外にも図書館が提供しているものがあります。それは、人が学んだり、自由に時間を過ごしたりできる「場所」であり、そこで働く「人」が提供するサービスや来館する「人」の営みです。図書館を居場所として活用する取組みは、この「場所」や「人」に光をあてるサービスだと言えます。

県立図書館や市町村立図書館は、学校が休みの週末や祝日、放課後も開館しています。館内は暖房や冷房もきいておりクールシェアやウォームシェアにも最適です。友人や家族とも来館でき、一人でも静かに時間を過ごすこともできます。気が向けば職員と会話を交わすこともできます。そして、そのための費用は一切かかりません。改めて考えると、図書館は人の居場所として最適な場所だと分かります。

これらは、どこの図書館でも当然のものとして提供する役割です。その意味では、図書館を居場所にという取組みは、新しいサービスを生み出すものではなく、図書館の持つ従来の可能性を改めて社会に知らせることが目的になっています。

4 住民のサードプレイスとして

時を同じくして、世の中に「サードプレイス」という概念があることを知りました。これはアメリカの社会学者のレイ・オルデンバーグ氏が提唱したもので、第1の居場所である「家庭」、第2の居場所である「学校」・「職場」に加え、もう一つ居心地がよく、人の集える居場所があれば人生がより豊かで生きやすいものになるという考え方です。家庭でも、学校や職場でもない図書館、そして、誰もが自由に無料で使える図書館は、まちのサードプレイスとしても最適だと考えました。

5 県内図書館での取り組み

取り組みを進めるにあたり、県内の市町村立図書館と学校図書館との協力を重視しています。それは、身近な図書館こそが人々の居場所になり得るからです。

市町村立図書館と連携して、こども食堂の運営者やスクールソーシャルワーカーを講師に招いた職員向けの勉強会を企画したり、図書館が多様な人の居場所になるためのアイデアを住民と一緒に考えるワークショップを開催したり、絵本作家のヨシタケシンスケさん作成のイラストステッカーやチラシを使った広報キャンペーンを行ったりしました。また、当館では、図書館ボランティアの機会をひきこもりなどからの社会復帰のステップとして活用してもらう取り組みも行っています。これらの積み重ねにより、図書館は居場所という考え方が県内に広まりつつあります。

併せて、図書館内に限らず子どもたちの身近に本のある場所を作ろうと、市町村立図書館からこども食堂・学習支援団体への本の貸出しや提供、県立図書館から県福祉相談センターへの本の貸出しなども始まっています。当初は県立・市町村立図書館を中心とした取り組みでしたが、現在では、趣旨に賛同する学校図書館も加わり、子どもたちにとって更に身近な居場所づくりが進んでいます。



※ヨシタケシンスケ氏作成のイラスト



※令和元年に実施したワークショップの様子

6 図書館が取り組む意義

社会にとって、図書館が居場所であるメリットはどこにあるのでしょうか。それは、図書館に、人が人生に必要なことを学ぶために役立つ資料があるからです。最近では、仕事や生活の課題を解決するために図書館資料を活用する人が増えています。図書館がより多様な人の居場所となり、そこで人が自身の課題を解決したり、次のステップに進んだりするための資料を手にすることができれば、経済的困窮や様々な家庭が抱える困難の解決につながるかもしれません。

7 今後の取組みについて

図書館が居心地のよい居場所になるということは、住民の皆様が、図書館を自分たちの場所だと感じてくださることが大切です。そのためには、この取組みを、住民の皆様と一緒に進めていかなくてはなりません。その結果、図書館をより身近なものとして感じる人が増えれば、図書館は社会の居場所としてまた一歩前進できると考えています。

高橋真太郎（鳥取県立図書館 情報相談課係長）